

文藝

十二月號

第一卷・第二號
河出書房發行

文藝雜誌

昭和十九年十一月二十日印刷納本・昭和十九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

昭和十九年十一月二十日印刷納本（毎月一回一日發行）

文藝通卷第二號

（特）賣價九拾七錢

O15



帝國臓器の
純粹天然女性ホルモン

（製法特許）

オパホルモン

奏効正確にして・副作用を伴はず

女性と生理快調

卵胞（女性）ホルモン分泌作用の衰退・無力が女性に特有な生理的苦痛即ち月經不順、下腹痛、腰痛、頭痛、四肢冷感、疲労倦怠、經神衰弱其他の不快を伴ふことは想像以上である。斯る女性には不妊症、流産等の失望が多い。オパホルモンは純粹天然卵胞ホルモンの特長を最強に發揮してよく短期間に機能を強く正しく不快症状を消滅せしめ健康濃刺たらしめるので定評がある



（注射一管一万國際單位）
（錠劑一錠五百國際單位）
女性ホルモンを經皮的に作用させる
オパホルモンバスタ

製造發賣元・株式會社 帝國社 臓器藥研究所（川崎市大宮町）



まにらをとめ

向井潤吉筆

(一) うたぐい
(二) あま、乱と執事あ
の張板
(三) 永野、紅いものと
かき書と

文藝第二號目次

草	分……野上彌生子(七)
ト	ランブ……中 勘 助(三)
父	の 像……伊 藤 整(四)
故	園(續)……川端 康成(五)
墓	場(リルケ)……堀口大學譯(七)
ま	すらを還る……田中 克己(三〇)
雙	槐廬襖鈔……石田幹之助(一)
雪	あかり日記(續)……谷口 吉郎(六)
わ	が 讀 書……(二)(四)
修	羅の文學……山本 健吉(四)
文	學の叢知……土井 虎賀壽(四)
素	描……向井 潤吉
飾	り 繪……吉岡 堅二
	久保田 久一

雙 槐 廬 襖 鈔 (一)

石 田 幹 之 助



吉岡堅二

ワルトブルクの歌^{ゼンカウリク}競^ベはワークナーの名曲に依つて人によく知られ、ツールーズの街頭にトウルバドール
が新聲を競ふ姿はローレンスの彩管を通じてその俤は今になほ生きてゐる。それとこれとは趣を異にするが、唐の
上都長安城中にも時にまた一種の歌競^ベが行はれた。いつの世からか、白樂天の弟白行簡の作と傳へる「李娃傳」
のうちにその例がある。勿論小説中の一場面に過ぎないから、その時その人によつてその事が行はれたとは解する
を得ないが、市井の風俗の一として唐時少くともその首都に斯かる慣はしのおつたことは察するに難くない。
「李娃傳」は夙に人口に膾炙せるを以て今改めてその筋を述べるまでもあるまい。繁陽^{はんやう}の大姓鄭氏の子、試に應ぜ
んとして長安に在り、一日平康の鳴珂曲に妓李娃を見て深くその容色に迷ひ、遂に妓家に流連荒亡してまた他事を
顧みず、「日に優倡儕類を會し、狎戲遊宴して囊中^{ぶくろ}蓋^{もと}く空し」きに及び、計を以て娃の母のために娃と隔てられ、
その棄つる所となつて忽ち窮巷に落魄の生を送ることとなつた。鄭生が僑居の邸主は初め之を哀れんだが、生が怨
懣の極疾を發し、その漸く篤くしてまた起つ能はざるを見るや、之を逐つて凶肆に徙した。凶肆とは人のために葬
事一切を周旋する家で、今の所謂葬儀社である。祭場の陳設は固より、葬列の儀飾その他すべてを理するものであ
るから、梓器・車輿・香華を始め、副葬の土偶・芻靈・紙錢の類まで備はらざるはなかつた。よく哀挽を唱ふるも
のを養ひ、世の需めに應ずることその業の一部である。當時長安には東西の二市あり、凶肆もその各々に分れ存

な村をつくりあげるのも一種の創造だよ。君たちも下などに来るより、こつちの仲間へはひり給へ。」

自分で食べておいしいものや、讀んでおもしろかつたものを、是非分けて食べさせ、貸して讀ませようとするのにも似た子供らしい熱情に、村の人たちは共通に捉はれてゐた。さうしてこんな場合「下」と呼ぶのは輕井澤のことであつた。この形容詞は、海拔三千六百尺の彼らの土地よりも、著名な避暑町は六百尺低くなつてゐる地理上の比較よりは、もつと複雑な意味を含んでゐた。知的で、健全で、素朴な共同生活を村の憲法とする彼らは、いはゆる下の輕井澤の奢侈と華美にゆめゆめ見倣つてはならなかつた。それ故なにか比較する時、口癖のやうに下、下といふのは否定であり、反抗であり、蔑視であり、ひそかな己惚れであつたが、一面また酸っぱい葡萄の羨望でないこともなかつた。男女の間柄でも相手の悪口をいふのは、そのひとを愛してゐる場合があるのだから。彼らの祕密は、明けの年になつて驛の建物を少し大きくくり變へた序でに、名前をも新らしくつけ直した時、尻つぽをだした。北輕井澤。――たしかに北には違ひないが、南輕井澤が本家の避暑町からはほんの一筋の汽車路しか隔たつてゐないのに引きかへこれは五里も北方にかけ離れてゐる。もし文字に距離を表

はせるものなら、北――輕井澤、とダッシュを二三寸も長く引くべきであつた。それなのに金はなくとも理窟は職業柄みんな上手にいふ村會が、この矛盾にたいしてはべつに議論しようとはしなかつた。奇妙なのはそれのみではない。鳥籠別荘だの、呆れたところだの、馬鈴薯ばかり食べてゐられるかの、と悪口をいつて歸つた友だちが、ぽつぽつと毎年仲間入りをした。杳掛の驛で出逢つた吉田夫妻も約束を忘れなかつた。もうふたりではなく、赤ちやんで三人になつてゐたその家族は、やがて村の人であつた。分譲地は何倍かにひろがつた。落葉松地帯も瀧村の家のみではなかつた。熊が現はれないかを怖がられた幽谷が、散歩路の一つになり、たうてい寄りつけもしなかつた逞ましい茅地の小山に新らしい赤屋根が輝いた。水道も木管を使つて完成した。テニス・コートがつくられ、バスケットボールの仕合のできる運動場が備はり、沸かし湯ながら温泉のついたクラブハウスまで出来あがつた。變化はそれくらゐに留まらなかつた。前の年までは羊齒がいちめんに茂り、ちよろちよる水の音のしてゐた濕つぽい窪地が、まんまんと青い水を湛へて、美しい湖に變じた。村の一部を貫いて高い草に隠れたり現はれたりして流れてゐた小川を、堰堤でせきとめたのである。村をますます快適に麗はしく成長

されることに、村會の人たちに劣らぬ熱情をもつた老學長と實行的な部面を悉く引き受けた、工事主任の原田のへんに壯んな事業慾がなかつたら、こゝまでは行かなかつたに違ひない。でつぷりした小男の、あたまたの禿げた、艶のい

わが讀書

- 1 座右の書
- 2 最近の文藝書

菊池重三郎

- 1 日本文學報國會編「定本國民座右銘」(朝日新聞社版)、齋藤茂吉著「萬葉秀歌」(岩波新書)與謝野・正宗編輯校訂「日本古典全集」會宮一念素描「すそ」(春島會版)
- 2 「八雲」(第三輯、小山書店)、宇野浩二「島崎藤村」廣津和郎「徳田秋聲論」、中野重治「國外と遺言狀」など、それぞれ入念な評論があり近來になく堪能した。

「福翁自傳」(岩波文庫)明治維新前後を生命がけで歩んできたひとの、商切れのない思ひ出話を聴いてゐるやうで、この人の積極性にうたれた。エイルウィン物語「ウォッダントン」作。戸川秋骨譯、國民文庫刊行

會)十九世紀の英吉利の戀物語だが、ジプシイの生活が覗けて興味深かつた。

中村光夫

- 1 フロオベル「書簡集」川路寛堂著「川路聖謨之生涯」川路聖謨文書「兩者とも狭い意味の文學書でないかも知れませんが、優れた文學的感銘をうけたのでここにあげておきます。
- 2 「スタンダール」(バルムの僧院)を後れながら讀み、スタンダール風の生々しい人間が活躍するので面白く思ひました。日本の横光氏の「旅愁」、眞實のこもった録られた書物として。

吳 茂一

- 1 座右の書と申すのも特にありませんが平常愛讀するものとしては外國のものはモロス「イリアス」、ギリシア詞華集」など。日本のものでは萬葉、良寛、宋元名畫集など、いつ見ても心を慰め高めてくれますから。
- 2 「スタンダール」(バルムの僧院)を後れながら讀み、スタンダール風の生々しい人間が活躍するので面白く思ひました。日本の横光氏の「旅愁」、眞實のこもった録られた書物として。

い赤ら顔にロイド眼鏡をかけ、ガンデーに斷食の代りに肉やてんぷらや鰻やありつたけの油つこいものを押してこんだら、こんな恰好にもならうかと思はれる男が原田であつた。村會を開くと理論ばかり戦はして出費はなるだけ省かうとする教師たちを、彼は内心小馬鹿にしてゐた。教師たちはまた彼を俗物扱ひにしたのではあるが、最も單純な空氣でさへ、それをつくるには二つの異なつた元素を必要とすることを忘れるほど無分別ではなかつた。かうして五十六年たつと百數十軒までふえた家は、一行の新聞廣告をしたわけでもなく、言ひつぎ語りつぎといった傳承法にも似通ひ、神話的な素様なおしやべりと誘ひ合ひで發展したので、一軒一軒が友だちであるか、親類であるか、もしくは勤め先の仲間同士でないものは殆んどなかつた。皆親しく、遠慮がなく、明けつ放しで、なにもかも筒ぬけであるだけに、少し小うるさくないこともないが、それだけお互ひに便利で、親切とおせつかいが時時こつちやになるこの村について



吉岡堅二筆

ますらを還る

田中克己

ちははの國は紅葉し

篠原に霞たはしる時ちかつきぬ

たよりあり、功^{いさを}し立てて

つはものはそのふるさとに神とし還る――

はじめでの召しにゆきしは

北支那の紅葉するくに

かへり來て紅葉を見つ

いひしことわれは忘れず

大陸の空いや青くその紅葉さらに紅しと

ふたたびを召されてゆきし

濠北はマダン、メラウケ、アイクベか

さだかに知らず――常夏の國にありける

紅葉なく青き空には

敵機のみ日がな舞ひたり

ますらをやいさを語らず

飛機のみか弾丸^{たま}も送らぬ

ふるさとに恨みも云はず

三年経しけふたよりあり

――ふるさとに神とし還る。

トランプ

――思ひ出――

中 勘 助

姉の手紙は後にしてきた世間へもう一度私をたち歸らせた。生家はもとより親戚知人とも一切交渉を絶つてしまふつもりだつたのだが。その氣もちを知つてゐればこそ姉のしらせも愈々の時までこなかつたのであらう。

□□さんがもう一年も入院してゐて、今は小康を得てるけれど早晚いけな

いとのこと。あれほど可愛がり、あれほどなつてからも何年にもなる。

私は寺を出た。心境的に棄て去つた世界へ踏み込むところになにか息苦

しさを覺える。道も遠し、乗物も少いうへに、のろい時分のことと途中で

これ一時間半ぐらゐもかつた。大きな病院によくあるやうに棟から棟

へと曲り曲つて行きつくはてもなささうにつづいた廊下、そこにはところ

どころ消毒薬が異國の風がはりな香料めいた匂ひを漂はせ、兩側の窓ガラ

スをとほして空や、中庭の青草や、花卉の花などが目をよろこばせ、人が

多く集つてゐるにもかかはらず病院らしい静かさと清潔さがあり、淵の底み



吉岡堅二筆

と促すのを

「をぢ様があんな怖い目をしてらつしやるから」といひかけてまた笑ひこけられる。で、今度は私に

「なあに　をぢ様」

ときく。

「私が歸つてからお母様におききなさい」

といつて私も笑ふ。ひと勝負すませたのち私は自分のちよつとした失策が誘つた光輝ある爆笑によつてすっかり憂鬱をけし飛ばされた病室の扉をたてて寺に歸つた。あとにはまた暫く笑ひがつづいたことであらう。浮世にはいつも夢の花が咲いてゐる。

その後殆んど顔を合せる折もなく、たまたま逢つても話を
をするほどの餘裕もなかつたが、□□さんは野球の監督を
やるほど丈夫になり、落着いた頼もしい青年になつた。

先年親戚の佛事で出逢つた時に何かと先方から話しかけたのが最後で、帝大を卒業何省かに就職したときいて間もなく突然亡くなつた。そのうち一度ゆつくり逢つて話してみたいと思つてゐたのに。

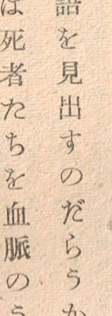
いつぞやお彼岸の頃私はふと思ひたつて青山の墓地へお詣りをした。私はお花のかはりにぢきそばの道ばたで賣つてた風車をかつてもつていつた。墓地にはやはり同じ時に

墓場

(R・M・リルケ)

堀口大學譯

これ等の墓なちに何か生命の後味でも残つてゐるのだらうか？そして蜜蜂はこれ等花たちの口の中に無言の半語を見出すのだらうか？花たちよ、人間幸福本能の囚はれよ、お前たちは死者たちを血脈のうちに秘めてこの世へと戻つて來るのだらうか？花たちよ、どうしたら人は死の宿命からのがれ得ようか？どうしたら人は、自らの花と咲き丁らずにゐられようか？ばらはそのあらゆる花瓣で人間から遠ざからうとするのだらうか？それとも孤獨のばら、ばらばかりのばらになりたいといふのだらうか？あの夥しい臉の下に誰のものでもない眠りを秘め



保田久一筆

原題 *Clunière*
これもリルケが佛語詩の一篇。

小田原でお馴染になつたあの可愛らしいので評判の□□ちゃんのお墓もあつた。――私は□□ちゃんの亡くなつた時のことをどこかに書いたと思ふ――で、仲よくお遊びなさいといふやうな氣もちで風車を花づつにさして歸つた。

かはい かはい子供たち

お彼岸まゐりのおみやげは

風に吹かれて青や赤

くるくる廻る風車

これも浮世の夢の花

雨にうたれて散らぬうち

かはりばんと手にとつて

お遊びなさい睦ましく

昭和十六年稿

新
蓮田善明著
花のひもとき
◇本書は古代より中世ま

花のしるしを
◇本書は古代より中世までの古文学の果である。古典がみづからに示す無量無色の神韻の調べを樂く嚴かに語らうとしたもの。

棟方志功著

板

を作品によつて示さうとする。

價B
 古文學の果であ
 無色の神韻の調べ
 量。

價B
 四・三・八判

價B
 約一・八・五判

筆との對照性

河出書房

高き厳しさのもつ天上の光りが快明な不可思議な救ひを用意する。子規に早逝の句がなる。

春 浅く乳も涙も凍りけり

悲痛の中によくも若き母親のみづみづしい感覚を溶かし得た佳句に相違ないけれども、ここには未だ悲哀にたゞよふ切なさのみ見出され天上の光りによる決定的な救済は見出されない。藝術は光波の如く透明快活でなければならぬ。芭蕉は高き嚴肅さによつてこの光源をとらへ得たのである。而も僕の「早逝の形而上學」はかくの如き芭蕉とリルケへと展開せしめないでは止まり得ぬのであり、そしてこの展開の中に始めてあの記紀の二元を統一する大和的古典性の復活を見出さねばならない。何故にであらうか。

芭蕉は早逝の悲痛に壓倒された老境の父親の慟哭を物靜かにその夜半の寂寥に於て把握し、そのこの上なく清涼な靜けさを一滴の涙のたゞならぬ出来事に凝結せしめた。早逝といふものをその悲痛な慟哭のモチーフに於て結實し得たこの文學的莊嚴は古今東西の歴史を絶して永遠の天空を獨歩するものである。文學が客體的な事件そのものを追究する論理でなく、事件をその成立のモチーフに掘り下げる心理探求でなければならぬ限り、このような芭蕉は文學の古典であるのみならず唯一の正風としての古典でなければならぬ。

リルケの悲歌はそのモチーフに於ていささか趣を異にする。リルケの悲歌には、早逝するものへの嘆かひの主體の外に、早逝者そのもののあり方へのモチーフが決定的に働く。佛教の傳説によつてあらゆる客體的存在を空とし無とする純粹主體性の傳統を最大限に生きた芭蕉は嘆かひの主體性を文學的に歌ひ盡したのである。

ども、嘆かひの客體そのものを歌ふモチーフを原理的に所有してゐない。然るにリルケにあつてはむしろこの客體的モチーフが決定的であつた。早逝するものたちが、その死に於て無に歸するのでなく、反つて逆に——恰も母親の乳ぶさを手放すことが幼童の成育を意味するやうに、最早や地上のものへの配慮を要せぬ程に逞しく強健に生長した故を以て天上に旅立つといふこと、死が單なる否定でなくて地上の制限を破る程にも大きな積極的肯定であること、このやうな客體的事實としての早逝者の「存在様式」が決定的である。

このモチーフをその客體的性格の故に論理と呼び哲學と名づけるならば、この論理と哲學がリルケを決定的に芭蕉から峻別する。而もこのリルケの論理と哲學とは人間の基本衝動としての原始性に於て生命づけられてゐる時に宿る形而上學である。何となればこの早逝者としての客體的存在様式は決して理論的に構成されたものではなくして、先づ第一には早逝の嘆かひの主體のモチーフに支持せられてゐる。第二には早逝者の生存そのもののモチーフに基底されてゐるからである。

リノスの早逝への嘆かひからこの嘆かひの主體の切ない挽歌として最初の音楽が人類の歴史に誕生した。嘆かひの主體にこのやうに最も積極的な素晴らしさを生み出さしめたその根據を成すものとして——早逝者そのものの死の積極性が導かれてゐる。主體の側での音樂の誕生は結果として成り立つものである故に、自からの素晴らしさに優先してその原因の素晴らしさを要求し支持す。このやうに何處までも文學の本來的な主體的モチーフを深めゆきつづその背景として客體的なモチーフを展開しゆくところにリルケの文學的衝動そのものの中に宿る哲學的衝動が成立する。古事記が物語的抒

わが讀書

- 1 座右の書
- 2 最近の文藝書

幸田 成友

1 目録と年表と字引とです。目録は自分が登館閱覽の出来る圖書館の目録を第一とします。年表は最初に使用した新撰年表も、その次に使用した東西年表も、繙閱に不便な程もみくちやになつたので、今度は何を使はうかと思つてゐます。近頃二三の年表を見ましたが、記事が委しいだけに紙数が多く、却て繙閱に不便な氣がします。それから陰陽曆の換算には今迄は三正綜覽、近頃は神田理學士の年代對照便覽を重寶してゐます。字引は國語及び外國語のもの數種、いづれも小形のものを

舟橋 聖一

- 1 源氏物語、西鶴五人女、等最近は特に實のある文藝書は見當らず候。この頃讀んだものでは内藤達氏「遺魯傳習生始末」、西下經一氏「日本文學史」第四卷、芹澤光治良氏「孤絶」、阿部知二氏「火の鳥」等。又、必要あつて堀辰雄の「かげろふの日記」を讀返し、感銘を新たに致し候。
- 2 芭蕉「奥の細道」「嵯峨日記」そのほか。ボードレール「惡の華」、「鳥木赤彦歌集」。

山内 義雄

- 1 生島道一「日本の小説」、著者はフランス文學者ですが、この書に於て、所謂外國文學研究者の日本小説觀めいたところ
- 2 芭蕉の「奥の細道」「嵯峨日記」そのほか。ボードレール「惡の華」、「鳥木赤彦歌集」。

眞島、大幸、柴田三博士監修

近 化學實驗學 研究實例篇 I

A・5判 價約一〇、〇〇〇 千、七〇

有機化學に従事してゐる人々の各自の研究の動機方法、過程、そして完成に到るまでの間の困難やその打開等を経験的に收録したものと

河 出 書 房

編輯者の椅子

某日、私は雑誌に幼い詩をかきとめた。

白い毛糸

某地にかへつた飛行兵は紺青の空のおくがにいま自分が描いてきたひとすぢの飛行機雲をみつめる

ひとすぢの

白い毛糸のあの雲よいとけなき日

母上が編んで下さった

白いジャケツはどこへいつたか母上よ

あなたの限らない愛の教へがいまあそこに浮んでゐる

基地にかへつた飛行兵は愛する國土をまもるために身をもつて編む白い毛糸ならざる白い雲を紺青の空いつばいに織りめぐらす日を想ふ

けふの日のわがためにこそ痛々しくもあれさせ給うた母上のあの日の尊い指先を想ふ

某日、敵機帝都上空に飛來。

巨大な翼が高い蒼穹をよこぎる。銀灰色と紺青が溶けあつて如何にも美しい。美しいだけに何かしら心内に怒りが沸る。はやくたたき落して視界から抹殺したい。畜生！と思はず叫びが口を衝いて出たのである。山間の樹立の中の某氏の書齋で私は文學を語つてゐた。日本の軍隊は強い、しかし日本の現代の文學はどうか！ともし外國人がたづねたら、これだ！とすぐに用せるやうな雑誌が一冊なければいけない、私はそのときこの文藝を出したい。そんなことを興奮しながら語つた。某氏は永いいたづきの身を忘れたやうに元氣にうなづかれた。私は長い歸路を忘れてゐた。その時敵機退散のサイレンが鳴つた

某日、私は神風特攻隊の新聞記事を書きとつた。机の上のせて仕事をしてゐるうちに何故に私はそれをきりとつたかと反問してみた。くやしくなつた。これは他人事ではない、今更感激することではない。ただ泣けばよいのだ、泣いて立ちあがることなのだ。

某日、私は神風特攻隊の新聞記事を書きとつた。机の上のせて仕事をしてゐるうちに何故に私はそれをきりとつたかと反問してみた。くやしくなつた。これは他人事ではない、今更感激することではない。ただ泣けばよいのだ、泣いて立ちあがることなのだ。

文藝
十二月號
第一卷・第二號
◎價九拾五錢
特別行爲稅相當額二錢
合計九拾七錢

昭和十九年十一月廿日印刷
昭和十九年十二月一日發行

編輯人 野田宇太郎
發行所 東京都北多摩郡武蔵野町吉祥寺五三
印刷者 安達信雄

印刷所 東京都牛込區市谷加賀町一ノ十二
東京都日本橋區通三ノ一

發行所 河出書房
電話日本橋二七七七番
振替東京一〇八二番
(日本出版會會員番號三四〇六八)

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

戰時重點版・川田順著

定本吉野朝悲歌

吉野時代の君臣八十七人の悲歌四百十九首を詳解し批評す、又宗良親王の御傳記及び御歌を特に詳しく研究す。

B六判五七〇・頒稅未定 四、〇〇

田代安定著・圖版二十數葉

沖繩結繩考

結繩文化に關する貴重なる記録といふべきもの、挿入の圖版は凡て調査書と實物により撮影せるなり。

A五判三〇〇・頒稅未定 四、五〇

奈良縣教育會編

大和史料(中卷)

郡別に町村、山川、神社、舊跡、城壘等に亘り、肇國以來の由緒に關し傳承文獻等の史料を著く網羅せり。

A五判六二〇・頒稅未定 一、一〇〇

岡田正之著

近江奈良朝の漢文學

本書は多年名著、近江奈良朝の漢文學に、慈惠大師の入唐紀行に就ての一論文を増補せり。

A五判三三〇・頒稅未定 五、〇〇

富山房 大和繪史研究

下店靜市著

大和繪史研究

A五判二二〇百餘頁
圖版二二〇原色五
價二八・六〇

俳草畫小徑

A五判一五〇
圖版二八原色四〇
價一五・〇〇

紙漉史考

B五判特製
價二八・六〇

民族詩論

中野六郎著

林三竹著

實價約四・二〇

店書井櫻

三三町塚大川石小京東